

## 「精神主義」はだれの思想か——雑誌『精神界』と暁鳥敏——

山本伸裕

はじめに

ここに収録された諸論文に清沢晩年の思想的な終着点があると考へてきただろうことに、根本的な転換を迫るものとなるであろう。

一般に清沢満之の思想は、前期の「宗教哲学」を中心としたものと、後期の「精神主義」の二期に区分されて理解されてきた。しかしながら、後期の思想といわれる「精神主義」期に書かれたものを丹念に読み込めば、後期と前期との間に必ずしも思想的非連続性を認めることはできないのではないかといった印象が拭えない。特に「雑誌『精神界』所収論文」には、文体にも思想的クオリティにも、かなりのばらつきが認められるよう感じられてしまう。

本稿の結論から先に述べておきたい。「雑誌『精神界』

所収論文」として『全集』に収められているもののうち、清沢の記名入りで発表された論文の多くが、清沢自身の筆によるものではないという疑いが強い。また、実際に清沢自身の手による原稿の存在が推定されるものであつても、編集者によつて恣意的な修正が、しかも決定的な箇所において加えられている可能性が極めて高いと考えられる。

『全集』の第六巻に、精神界掲載論文として収録されている論文の数は、全部で四十三本にのぼる。これらは、記名のある「講話」欄に掲載されたものと、無記名の「精神界」欄に掲載されたものとおおよそ大別できる。詳細にいえば、「精神界」欄と「講話」欄以外に、「浩々洞註」として「解釈」欄に掲載されているものと、清沢の記名入りで「論説」欄に掲載されているものが一本ずつ、「雑纂」欄に掲載された論文が一本、さらに清沢の死から四年後に「精神主義〔明治三十五年講話〕」として「講話」欄に一本の論文が掲載されているが、これらに関しては文責が定かではないといふ理由で、ひとまず考察の対象から外してよいと思われる。したがつて、本論で検討の対象となるのは、残りの三十八論文ということになる。

なお、清沢自身の筆によるのではないと考えられる文章のすべては、記名入りの「講話」欄に集中しているが、このことは、まさに清沢満之その人の思想的精華にほかなら

ないと見なされてきたものに、清沢以外の人物の思想が混じり込んでしまつてゐる可能性を排除できないという意味で、極めて重大な問題であることはいうまでもない。

### 「成文」の意味

ところで、このことは従来の研究ではあまり注目されてこなかつたことだが、『全集』六巻の巻末にある「解題」には、「精神界」の「講話」欄に発表された記名論文（講話）のうち七本が、弟子による「成文」であることが明記されている。この指摘は、昭和三十年から三十一年にかけて法藏館から出版された『清沢満之全集』第八巻に依拠したものとされているが、『全集』の再版にあたつてあらためて検討が行われた形跡はない。

「成文」といえば、もともとしつかりとした草稿や講話など、元となる素材が存在していて、それを編集にあたつた弟子たちが師の思想に忠実に文字に書き起こしたか、あるいは文体を整えたうえで、かつその校正されたものを清沢に校閲させていると考へるのが一般普通の理解ではなかろうか。ちなみに、清沢は自分が書いた文章に手を入れてもらうことを、「成風」とか「御呵成<sup>(3)</sup>」と呼んでいる。このことから、「成文」といふのは、「成風」「御呵成」とい

うことと、必ずしも同義ではないと考えられる。

ところで、弟子の手による「成文」は、『精神界』の創刊号において早くも行われている。『精神界』第一号の「講話」欄に掲載された「信するは力なり」という一文がそれである。

幸いにして、この文章が「成文」された経緯については、弟子たちの記録からその消息を、ある程度までうかがい知ることができる。清沢の高弟の一人であつた暁鳥敏は、そのあたりの動きを以下のように伝えている。

第一号に先生の講話を出さねばならぬ。ところが先生は書いている暇が無い。諸君どうか宜しく頼みますと言つて、京都に行かれた。それで、多田君が、前に先生のされた講話を骨子として、「信するは力なり」といふ一文を書いた。ところがその中に書いてある小説『小公子』にあるフォントルロイの話などは、先生は読んだ事はない。この時も先生が京都にをられたので、先生が京都から帰つて来て、あんな小説がありますかと聞き、ちと読んでおかねばなりませんと、言うてそれを読まれたことがあつた。先生は大抵は全然の任しきりで何事にも干渉せられない。<sup>(3)</sup>

のことからわかるのは、弟子による「成文」作業は、師のまったく関知しないところで進められていたということ

であろう。当誌の「主幹」を務め、「監督」者でもあつたとされる清沢は、創刊当初から雑誌『精神界』については、自身の名前で発表される文章の思想的な内容までも含め、弟子たちの主体性に「全然の任せ切り」だつたのである。だからこそ清沢は、最初からそこに掲載される文章の内容には何ら干渉しなかつたし、このケースにおいては、弟子たちの取り組みに触発されるかたちで、普段は読むことのない物語にまで興味を示してみせることで、むしろ彼らの活動を積極的に後押ししている感さえある。

もつとも、清沢の弟子たちも、「成文」を行う際に、もともとなかつたような逸話を勝手に書き加えることには、最初はそれなりに気兼ねないし抵抗があつたことも事実であるようだ。しかしながら、清沢がこの件において極めて寛容な反応を見せたことで、その後、編集にあたつた弟子たちはさほど気兼ねすることなく、元々に変更ないし手心を加えるということが常態化していくのではなかろうか。そうしたやり方が編集の段階で常態化し、ますますエスカレートしていくば、「成文」は、ほとんど弟子の「作文」に近いものになつてしまふことは想像に難くない。少なくとも、彼らには師の思想に勝手な手、心を加えることなく、忠実に「成文」しようという意識は、『精神界』の刊行当初からかなり希薄だつたように思われる。

参考までに、『精神界』における「成文」の実態について、もう一つだけ実例をあげておこう。

明治三十五年九月発行の『精神界』二巻九号に、「倫理以上の安慰」という一文が掲載されている。この文章について、曉鳥敏は、「たしか、あの文は先生のお話を聞いて安藤君が書いた」と証言しているが、その内容は明らかに一席の講話で話されたものをまとめた性格のものではない。

この文章を「成文」した安藤州一という人物は、『精神界』の編集が行われていた「浩々洞」で三羽鳥と謳われた曉鳥敏、多田鼎、佐々木月樵の、学生時代の同級生であり、「成文」を任せられた月の前月、すなわち明治三十五年の八月に、はじめて正式に浩々洞のメンバーに迎えられている。彼はその約一年半後の明治三十七年三月に、入洞前後の七月から八月頃にかけて清沢との間で交わされた談話をもとに、『清沢先生信仰坐談』という一書を上梓しているが、実は「倫理以上の安慰」は、この本のなかの、時や場所を異にするさまざまな記述を集めて貼り合わせたような性格の文章なのである。というのも、全部で九つの段落で語られている「倫理以上の安慰」の内容のうち、八つの段落で『清沢先生信仰坐談』にあるのとほぼ同じ内容の記述を認めることができるからである。

そうした事実から、『精神界』で清沢の名前で発表され

る「講話」の元ネタとして、清沢が「成文」を行った弟子たちに何らかの素材を、その都度、毎回、提供していたわけではないということが知られる。だとするなら、極端な場合には、たとえ清沢によって何ら「成文」の素材が提供されていないときでも、編集者はかなり随意に、清沢の記名入りの文章を「講話」と銘打つて『精神界』誌上に発表することができたとも想像されるのではないだろうか。もつとも、安藤は、自身で「成文」したものを持めて、それら「成文」された文章の「趣意は固より先生の意を粗述したもの」と主張してはいる。だが、『精神界』の監督者とされる清沢が、弟子たちに仕事を「任し切り」であればあるほど、そこに弟子たちの思想が色濃く反映されていくことになつたであろうことは、想像に難くない。

### 「執筆」論文の存在

とは言うものの、弟子たちによつて「成文」されたものが、『全集』に指摘のある七本すべてであるとするなら、それらを清沢本人の著作とひとまず区別して「精神主義」の思想を論じていけばいいだけの話であつて、その区別さえしつかりとしておけば、研究においてそれほど大きな障害とはならないはずである。

近年、岩波書店から出版された『全集』における「成文」の記述は、それ以前に法藏館から出版されている『清沢満之全集』の記述に基づくものであることについてはすでに述べた。ところが、昭和十四年に大東出版社から刊行されている、曉鳥敏編『清沢満之先生の文と人』の巻末に掲げられた「著作講演年表」には、『全集』では言及されていない二一本の論文（講話）について「曉鳥敏執筆」と記されているのである。このことは、従来、清沢満之の著作であり彼自身の思想であると固く信じられてきた諸論文のうちにも、まだいくつかの「成文」あるいは「執筆」が潜在的に含まれている可能性を示唆するものではないだろうか。

「講話」欄に掲載された文章のうちには、数は少ないものの、清沢の手紙の文面などから、清沢自身が確かに執筆し編集者に提出した原稿が存在していたであろうと推定されるものが、いくつか存在している。しかしながら、「精神界」に収録された数多くの文章のうち、実際に自筆原稿が確認されているものはたった三本に過ぎず、しかも、その数少ない自筆文でさえ、後述するように、編集者の手により思想的な価値に関わる書き換えがなされているのが現実なのである。

要するに、『全集』に「成文」と明記されている文章以

外にも、弟子の手による「成文」が、もつといえど弟子による粗悪な「作文」が、「精神界」で発表されている論文には、まだ多く含まれているのではないかということに、疑いの目が向かざるを得ないということである。

### 清沢満之と「精神界」のかかわり

だが、もしかりにそうだとしても、なぜそのようなことが罷り通ってきたのか。その点については、甚だ強い疑問が残ってしまう。そこであらためて問われるべきは、「主幹」とされる清沢満之が、雑誌『精神界』にどのような態度で関わっていたのかということであろう。ここでは当誌の性格や、浩々洞を拠点に当誌が刊行されるに至った経緯などについて、簡単に触れておくことにしたい。

そこでまず、創刊号から清沢が亡くなる三卷六号までに掲載された清沢のものとされる全論文、計四十二本のタイトル及び掲載欄について確認しておこう（論文一覧を参照）。これをみると、創刊号から一卷三号まで、一卷六号、八号、十二号の三つを除いて、ほぼ毎号にわたって「精神界」欄と「講話」欄にそれぞれ一本ずつ、コンスタントに文章が掲載されているのがわかる。

このうち「講話」欄については、早くも創刊号から弟子

が清沢の名前で「成文」していることはすでに指摘したとおりだが、二巻三号までに掲載された「講話」のうち、わかつているだけでも約半数は、直接清沢が筆を執つたものではないのである。この間、「講話」欄に文章の掲載がなかつたのは一巻六号の一回のみである。だが、これまでの事情を勘案すれば、この号だけ多忙などの理由で、清沢が「講話」欄への執筆を断念したとは考えにくい。

一方、同時期において「精神界」欄に掲載がなかつたのは、一巻八号と一巻十二号の都合二回である。ただ、「精神界」欄に関しては、どの資料にも、弟子により「成文」もしくは「執筆」されたという記載はない。さらに、「精神界」欄の論文については、毎回、清沢自身が認めたりとする証言も残されている。<sup>(10)</sup>このことからしても、実際、清沢による「精神界」欄への執筆は、これらの号にはなかつたと考えるのが妥当であろう。

ともあれ、二巻三号まで、『精神界』にはほぼ途切れる程度まで、主幹とされる清沢の協力や理解があつたであらうこととは間違いない。ところが、二巻四号以降になると、「精神界」欄に掲載される文章の数は激減する。以降、清沢が死を迎える三巻六号までの一年と少しの間に、「精神界」欄に掲載された論文の数はわずか三本に過ぎない。し

かもそのうちの一本は、弟子の多田鼎が清沢の日記から隨意に言葉を抜粋・編集したもので、別の一本は清沢が真宗大学で開かれた「親鸞聖人御誕生会」のために書き送つた祝辞が載録されたものなのである。

つまり、この頃から、弟子たちの熱意に応えようとする姿勢が明らかに失われてきていると見ることができるのではないか。具体的には、一巻四号以降、清沢自ら「精神界」欄のために筆を採つた可能性があるのは、二巻七号に掲載されている「生活問題」だけだと考えられる。<sup>(11)</sup>

とはいって、この時点で「精神界」から完全に清沢の心が離れてしまつていたというわけではない。そのあたりの事情は、明治三十五年三月十七日付けで稻葉昌丸に宛てた手紙の文面から、間接的に知ることができる。

精神界トカ無尽灯トカ将又勝友誌家庭誌迄ニモ御義理ハ尽シ度ケレトモ其丈ノ勇能ハ無之 大学ダトカ丙甲会ダトカ降誕会トカ誕生会トカ大谷会トカ青年会トカイヤハヤ頓ト閉口罷在候<sup>(12)</sup>

清沢がこの時期、真宗大学の学監としての業務で多忙を極めていたことは事実である。まして、彼は結核という不治の病を抱えていたのである。ただ、注目しなければならないのは、『精神界』に対し「義理」を尽くしたいと、友人に心のうちを漏らしている点である。自らが主幹を努

める雑誌に対し、義理を尽くすなどといった表現を使うこと自体、不自然ではないだろうか。

なかでも、当誌の発案者であり、発行及び編集署名人でもあつた暁鳥の、この雑誌にかける熱意には相当なものがあつたようである。事実、小文を含めると、一号あたり彼は十本近くの文章を寄稿していて、多いときは、たとえば二巻一号などには、いちどに十六本もの文章を寄せているのである。このことからも、雑誌『精神界』は、清沢満之の主体的な関わりに支えられていたというより、終始弟子たちの情熱と努力によるところが大きかつたことがうかがえるであろう。<sup>13</sup>

### 「三羽鳥」と『精神界』

『精神界』の企画と出版に深く関わったとされるのは、暁鳥敏、多田鼎、佐々木月樵の、浩々洞の「三羽鳥」と称された青年僧侶たちであつた。彼らは、もともと京都の学生時代に清沢の薰陶を受けた教え子たちであつた。京都時代からの恩師との交流を振り返つて、暁鳥は次のように語つている。

先生が明治二十九年の頃あの白川村においてた時分から、この後も、私は多田や佐々木と共に先生を訪問す

ることが多かつた。その折に私共はひそかに清沢先生は偉い方でありなつかしい方であるが、浄土真宗の宗乗を知られないから、どうかして先生を真宗の安心を味はうて貰ふやうに導かねばならぬと話し合ふてゐたのでした。<sup>14</sup>

明治二十九年当時のことを回想したものであるから、暁鳥はこのとき二十三歳の青年であつた。しかし、ここで語られている言葉には、在家（士族）の生まれであつた清沢に対する、生まれながらの仏教者としての過剰なまでの自負心が表れていると見ることができるであろう。こうした僭越極まりないとも言える発想が、その後、まもなく開始される東京での彼らの共同生活の、なかなかんずく、『精神界』を中心に行開されていく思想活動の根底にあつたことは見逃すことができない。つまり、『精神界』の出版を中心にして繰り広げられることとなる活動に、彼らをして向かわしめたものは、「淨土真宗の宗乗を知られない」師に、彼らと同じ「真宗の安心を味はうて貰」いたいという、何とも形容のしようもない未熟な野心だったというわけである。

そもそも、雑誌『精神界』発刊のシナリオは、三人が東上する以前から暁鳥の心に思い描かれていたことでもあつた。明治三十三年の七月に、暁鳥は三河の安城で開かれていた「三為会」の説教場に清沢を訪ね、同じくそこに来て

いた多田、佐々木とともに、玄関前で、三人の東上のこと、雑誌発刊の計画のことを打ち明けている。曉鳥によれば、清沢は即座にその計画を「嘉納せられた」というが、驚くべきことに、その半年後に世に問わることになる雑誌の「誕生の辞」を、曉鳥はまだ雑誌名すら決まっていない九月にはもうすでに書き上げてしまっていたというのである。<sup>(16)</sup>

こうした経緯からしても、とりわけ曉鳥の強い意気込みを知ることができよう。そして、実際、雑誌『精神界』は曉鳥個人の思想と強い熱意とに大きく影響されたものとなっていく。

たとえば西村見曉などは、弟子である曉鳥をはじめとする弟子たちと清沢の関係について、はじめは師弟の間に性格の対立があつたものの、やがて共同生活のなかでお互いに影響を受けあつていった、「弟子は勿論師匠に感化せられるが、師匠も又弟子の影響を受ける」と述べている。けれども、その見解は果たして妥当なものといえるかどうか。單刀直入にいえば、当初の目論見どおり曉鳥らは、師の名聲に乘じて自らの思想を喧伝していくための手段に『精神界』を利用したといつても過言ではないのではなかろうか。

## 五つの観点から

ところで、『精神界』の社説にあたる「精神界」欄の文章と「講話」欄に掲載された文章とを見比べたときに強く感じることは、思想的なものも含めて、語り口や文体にかなりの違いがあるということである。このうち「講話」欄の九つの論文については、どの弟子が「成文」(執筆)したものであるかがわかっている。そのため、使用されている語彙や文体、さらにはそこに見られる思想的傾向を、弟子たちが書き残しているものと照らし合わせて検証することは容易である。

清沢の「講話」を執筆した人物として名前が挙がっているのは、曉鳥、多田、佐々木の三羽鳥と安藤州一の四人の弟子たちである。しかしながら、本稿ではこの四人の一人ひとりについてその文体や思想的傾向を論じてゐる余裕がないため、三羽鳥のなかでも特に中心的な役割を果たした曉鳥敏の文体や思想に焦点を絞つて分析を進めていくことにしたい。

先に述べたように、無記名で掲載される「精神界」欄については、安藤の証言では、毎回、清沢が筆を執つたとされる。「精神界」欄の文体にはほぼ共通して見られる特徴と

してわかりやすいのは、一人称表現に「吾人」が使われているという点である。<sup>(18)</sup>なお、これは『精神界』と同時期に『精神界』以外の雑誌で発表されている文章にも共通して見られる特徴である。

以下、『精神界』三卷六号までに収録されている四十二本の文章のうち、「解釈」欄と「雜纂」欄、および「論説」欄に掲載された四本を除く、三十八本について、以下に示す(1)-(5)の五つの観点から一通り検討を加えてみたい（論文一覧を参照）。

(1) 第一のポイントは、いま述べた一人称の表現にある。『精神界』欄の論文のうちで「吾人」が使われていないのは「絶対他力の大道」と「他力の救済」の二本のみであるが、この二本にはいずれも自筆の原稿が残されている。それを見ると、前者については編集者の手によって「吾人」がすべて「我等」に書き換えられていることがわかる。また、後者は、もともと「祝辞」として真宗大学に送られた文章が「雜纂」欄に載録されたもので、文章の性格上、「吾人」という一人称表現は似つかわしくなかつたことはいうまでもない。

なお、「講話」欄掲載論文においても、自筆原稿の存在が推定されるものについては、基本的には「吾人」が使われている。そのうち、「善惡の思念によれる修養」(二卷十

二号)については、興味深い現象が見られる。文章前半では「吾人」が用いられているのに対して、文章後半では「私共」という表現に変わっているのである。これは、編集者による書き換えが行われたか、もしくは文章の後半部分が誰かによつて「成文」されたことを意味しているであろう。

(2) 第二のポイントは、思想的な面にも関わつてくることだが、他人に強いて勧めるような押し出しの強い語り口が見られるかどうかである。というのも、清沢は稻葉昌丸との手紙のやり取りのなかで、『精神界』の語りの傾向について、次のような不満を漏らしているからである。

精神主義ハ他人ノ云為ニ干渉セヌ筈ナリシニ飛ンダ失策ヲ仕リ候 シカシ忠告ハ必シモ採用ヲ迫ルモノニハ無之其取捨ヲ先方ノ自由ニ一任シテ満足スルモノト見レバ彼モ敢テ精神主義ニ反スルモノニモ可無之乎呵々稻葉から清沢は これ以前にも、手紙などでたびたび『精神界』の論文に忠告や批評をもらつていていたようだが、少なくともこの文面を読む限りでは、「他人ノ云為ニ干渉」する「失策」を犯したのは清沢なのか、それとも弟子の書いた文章なのは、判然としない。ただし、この手紙の書かれた日付が明治三十五年三月十七日となつてることから、二卷三号かその前号、前々号あたりに掲載された論文

に対するコメントであろうことは想像できる。

前述の如く、清沢の文章が掲載されるペースが極端に落ち始めるのはこの頃からである。そのことと、稻葉との間で交わされているやり取りとは決して無関係でないようにも思える。ともかくも、清沢がこうした率直な思想を親友に漏らしているのを見ると、清沢自身の語り口に「他人に強てかうせよと勧める」<sup>(25)</sup>ような傾向は、基本的にはなかつたと考えてよいであろう。ちなみに、「精神界」欄の無記名の論文にも、また同時期に執筆され、「精神界」以外の雑誌等に掲載された論文にも、そうした傾向は一切認められない。

一例を示しておきたい。「実力あるものの態度」（一巻七号）と題された「講話」の最終段落に「私共は、如来に頼りて、実力を備へ、世に処しては、実力ある者の態度を取り、外物のために擾乱せられず、自分に反対する人を愛憐して行くやうに心懸けてはどうであろうか」といった表現がある。この講話文は曉鳥が「成文」したものだが、この文章の元となつたと考えられる、明治三十二年の六月から翌年春にかけて書き下ろされた「有限無限録」の記述には、「他人に強いて勧める」<sup>(26)</sup>ような語り口は確認できないのである。

(ハ)三つ目は、文章中に經典等からの引文や高僧などの人

名が認められるかという点である。清沢の書く文章には、「飾り気」がなく、文学士らしく余計な情緒を排して理路整然と、むしろ淡々とした語り口を特徴としていることは、「精神主義」以前に書かれたものや、後期にあたる時期でも、「精神界」以外の媒体で発表されているものを読めばすぐにわかる。そうした清沢の文章、文体について、曉鳥は現に次のように評している。

先生の文章は飾り気のない、つまらん文の様であるが、深く味はふと滾々として尽きざる味がある。先生の文みたいに引文のない文も稀である。或る時のお話に、人の名など出すのは卑怯だ、やたらに人の名を出すのは人の面をかむつて何かやうとすると同じだと言はれたことがあつた

このように、清沢が書く文章の特徴のひとつは、他力門の仏教を下地に「精神主義」が語られる場合ですら、經典などからの「引文」がほとんど行われないという点にある。また、清沢の文章には、これも曉鳥が認めているように、師主や高僧などの名前が出てくることも非常に稀であるといつていい。少なくとも「精神界」に掲載された文章以外では、そうした傾向を確認することができる。ところで、かく語る曉鳥は、師の思想が、いわゆる「精神主義」の唱道以前と以後で大きく変わつたと理解してい

る。<sup>24)</sup> だが、実際のところ、『精神界』の「講話」欄以外の文章を読む限り、晩年に至るまで、清沢は哲学として信仰を語ろうとする態度を捨ててはいないし、最後まで淡淡とした語り口が貫かれているのである。したがって、「やたらに人の名を出すのは人の面をかむつて何かやらうとすると同じ」で「卑怯」と語ったとされる清沢の信念は、最晩年まで揺らぐことがなかつたとするのが妥当であると考えられる。<sup>25)</sup>

(二) 検証されるべき第四のポイントは、主張として恩寵主義的傾向が強く表れているかどうかにある。これまでの研究やさまざまの人物の証言によれば、三羽鳥のうち、曉鳥と多田の思想が特に恩寵主義的であつたことが指摘されている。<sup>26)</sup> そして実際、そのことは、曉鳥自身も率直に認めていることでもある。

私が先生の御在世の間から、特にその後になつてだんだんと感激的に仏陀を崇拜し、現在の境遇より慈悲の存在を説明しようとした私の仏陀は、妻の死と共に、いやがおうでも私の心から消えねばならぬやうになりました。自分は罪深い者であるが、この罪の深い私をこのままで抱き取つて下さるるといふ都合のよい仏陀の恩寵は私から消えたのでありました。<sup>27)</sup>

人生最大の不幸を経験する。この出来事を機に、「都合のよい仏陀の恩寵」は彼の心から消え去つていつたと曉鳥はいうが、同時に、それ以前から、すなわち清沢「御在世」の間から、恩寵主義的な傾きをもつていたことをここで彼は暗に認めているのである。

最晩年の清沢に師事した安藤などは、ヨーロッパのハーゲル学派が三派に分裂していくことになぞらえて、清沢門下に「信仰」的「政治」的「学問」的な色彩の違いによつて三つの思想傾向があつたと指摘している。そこで彼は、多田を「右党」、曉鳥を「左党」、佐々木を「正統」と名付けていたといつていて、要するに「信仰」と「道徳」の二元論からついに抜け出せなかつた多田と、「信仰」の「一元論を直進した為め、道徳問題の二元論を閑却し、「終に中道をふみはづし」た曉鳥、というのが、二人の人に対する安藤の評価なのである。<sup>28) 29)</sup>

また、あるとき清沢は、安藤に「私は婆娑即寂光土といふ事は、あまり有難く思ひませぬ」と漏らしたともいわれる。<sup>30)</sup> 明治三十三年一月発行の『仏教』(一五八号)に収められた「祈禱は迷信の特徴なり」に、清沢は「天命に安んじて人事を尽す」という言葉を残しているが、要するに安藤は「天命に安んじ」ることと「人事を尽す」ことが、一見、二元論的でないながらも、決してどちらか一方に偏ること

のない調和を見事に実現させていた点にこそ、清沢の「精神主義」の真価があると見ていいのである。しかしながら、安藤によればこれら二つの態度を、多田と暁鳥の両君は思想上、あるいは現実生活のうえで調和させることができなかつた。だから結局、彼らは安易な恩寵主義に逃れるしかなかつた。そのことで自己存在の正当化をはかるしかなかつたというのが、安藤の見方なのである。

そして実際、案の定というべきか、清沢亡き後、彼らの言語や文章は「悉く説法の態度」になつていく。だが、安藤によれば「これは実は曙町浩々洞時代よりの暗流」であつたともされる。<sup>(31)</sup> ともあれ、ここに『精神界』に収録された諸論文を検証していくうえでの、ひとつ的重要なポイントがあることは間違いないであろう。

(4)最後に押さえておかなければならぬのは、文体といふ外面向的な観点である。清沢の書く文章を、暁鳥は「飾り気のない、つまらん文の様である」と評しているが、かく語る暁鳥は、自分の書く文章に相当自信をもつていたようである。確かに暁鳥が書く文章は、詩的で情緒的力感に溢れ、読む者をして「頗る醉は」しむる力をもつものであつた。<sup>(32)</sup> そうした彼の文章でひとつ目を引くのは、常体をベースにした文体のなかに、適度に、しかも極めて効果的に敬体表現を混ぜ込んでくる技法である。こうした技法は、

読み手の情緒に訴えかけるのに、非常に効果的に機能しているように思われるが、清沢のものとされる文章のうち、『精神界』の「講話」欄に収録されたもの以外に、そうした修辞的技法が用いられている例は、まず見当たらないといつていい。

ただし、清沢から編集者に原稿が提出されたであろうと推測される「公徳問題の基礎」と「倫理以上の根拠」の二本には、この敬体表現の混入が認められる。とはいっても敬体表現の挿入は、前者では最終文の一箇所のみ、後者では冒頭の一段落だけに限られるため、編集者によつてあとから文が加えられたか、書き換えられた可能性も十分に考えられる。そもそも『精神界』では創刊当初から野放図な「成文」が許されていたわけで、ましてや「吾人」を「我等」に書き換えたり、一文や二文を書き加えたりする程度のことは、まったくの許容範囲内であつたと考えられる。<sup>(33)</sup>

### 思想と文体に見られる特徴

以上の五つが、検証のため便宜的に設定される観点である。<sup>(34)</sup> これらの観点を『全集』に収録されている「『精神界』所収論文」のうちの三十八本についてあてはめて分析すると、どんな結果が得られるのか（論文一覧を参照）。

「精神界」欄の諸論文に関していえば、「絶対他力の大道」と「他力の救済」以外、ポイントを獲得した論文は皆無である。しかも、これらわずかながらポイントを獲得した二論文には自筆の原稿が残されており、弟子による編集がなされていることがわかつている。このことから、「精神界」欄に掲載された諸論文は、ほぼすべて実質的に清沢本人の手によるものと考へて差し支えないようと思われる。次に、自筆原稿は未確認であるものの、弟子たちの証言や残された手紙などから、編集者に提出した原稿が存在したであろうと推測される「講話」欄の諸論文、「公徳問題の基礎」「善惡の思念によれる修養」「倫理以上の根拠」「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」四本について見てみよう。

これらについていえることは、加算されるポイントは「精神界」欄の諸論文に次いで概ね低いということである。しかも、それら少ないポイントのうちのいくつかには、微妙な問題も含まれている。要するに、たとえ清沢が原稿を提出していたとしても、編集者の独断で何らかの改変が加えられている可能性を排除できないと考えられるのである。だが、何といつても目を引くのは、「講話」欄掲載論文の示す指数の高さであろう。なかでも暁鳥と多田によつて「成文」（「執筆」）されたものは、佐々木や安藤が「成文」

したものに比べて、明らかに高い指數を示している。ここで焦点は、清沢満之の記名入りで発表された諸論文が、果たして清沢自身の筆によるものかどうか（つまりは清沢自身の思想はどうか）ということに絞られるわけだが、この結果を見る限り、弟子によつて「成文」あるいは「執筆」されたという記録のないものについても、清沢以外の人物によつて書かれている可能性が強く疑わざるを得ないのではないか。特に、清沢満之が唱道したとされる、いわゆる「精神主義」の思想的評価をめぐつて、最も多く批判にさらされてきたのは、一巻十一号の「講話」欄に収録されている「宗教的信念の必須条件」であるが、この論文が最高の五ポイントを獲得していることは注目すべきであろう。「精神界」の思想的内容が、世間の厳しい批判にさらされた直接のきっかけは、この「宗教的信念の必須条件」が掲載された翌月、すなわち一巻十二号の「精神界」欄に掲載された「精神主義と性情」という一本の論文にある。これは暁鳥の筆によるものであつたのだが、社説にあたる「精神界」欄の、それも冒頭に掲載された論文であつたために、多くの人が清沢満之が書いたものと誤解したらしい。もつとも、それは当然のことであつたといえる。というのも、「精神界」欄の冒頭の文章には、創刊号から一巻十一号まで、ほぼコンスタントに清沢の手による良質な論文が

論文一覧

| 卷号   | 論文タイトル                            | 欄           | 記名        | 成文  | イ | ロ | ハ | ニ | ホ |        |
|------|-----------------------------------|-------------|-----------|-----|---|---|---|---|---|--------|
| 一巻一号 | 精神主義<br>信するは力なり                   | 精<br>講      | 清沢        | 多田  | ○ | ○ | △ | ○ | △ | ☆★★★★☆ |
| 二号   | 万物一体<br>公徳問題の基礎<br>*三誓の文          | 精<br>講<br>解 | 清沢<br>浩々洞 |     | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ★★☆    |
| 三号   | 一念<br>自由と服従の双運                    | 精<br>講      | 清沢        |     | ○ | ○ | ○ |   |   | ★★★    |
| 四号   | 科学と宗教<br>達美近醜                     | 精<br>講      | 清沢        | 多田  | ○ | ○ |   |   | ○ | ★★★    |
| 五号   | 精神主義と物質的文明<br>智慧円満は我等の理想なり        | 精<br>講      | 清沢        | 曉鳥  | ○ |   | ○ | ○ | ○ | ★★★★   |
| 六号   | 宗教は目前にあり                          | 精<br>講      | 清沢        |     |   |   |   |   |   |        |
| 七号   | 競争と精神主義<br>実力あるものの態度              | 精<br>講      | 清沢        | 曉鳥  | ○ | ○ | ○ |   | ○ | ★★★★★  |
| 八号   | 樂天                                | 精<br>講      | 清沢        |     |   |   |   |   |   |        |
| 九号   | 先づ須らく内觀すべし<br>心機の發展               | 精<br>講      | 清沢        | 曉鳥  | ○ | ○ |   | ○ | ○ | ★★★★★  |
| 十号   | 精神主義と唯心論<br>真正の独立                 | 精<br>講      | 清沢        |     | ○ |   | ○ |   |   | ★★     |
| 十一号  | 精神主義と他力<br>宗教的信念の必須条件             | 精<br>講      | 清沢        |     | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ★★★★★  |
| 十二号  | 善惡の思念による修養                        | 精<br>講      | 清沢        |     | △ |   |   |   |   | ☆      |
| 二巻一号 | 迷悶者の安慰<br>仏による勇氣                  | 精<br>講      | 清沢        | 曉鳥  | ○ |   |   | ○ | ○ | ★★★    |
| 二号   | 精神主義と三世<br>客觀主義の弊習を脱却すべし          | 精<br>講      | 清沢        |     | ○ | ○ |   |   |   | ★★     |
| 三号   | 精神主義と共同作用<br>日曜日の小説               | 精<br>講      | 清沢        | 曉鳥  | ○ | ○ |   |   |   | ★★★    |
| 四号   | *親鸞聖人の御誕生会に<br>*信仰問答（一節）          | 雜           | 清沢        |     | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | ★★☆    |
| 五号   | 絶対他力の大道                           | 精<br>講      | 清沢        |     | ○ |   |   |   |   | ★★     |
| 六号   | 生活問題                              | 精<br>講      | 清沢        |     | △ |   |   |   |   | ★★     |
| 七号   | 天職及聖職                             | 講           | 清沢        | 佐々木 | ○ |   |   |   |   | ★      |
| 八号   | 倫理以上の安慰                           | 講           | 清沢        | 安藤  | ○ |   | ○ |   |   | ★★     |
| 九号   | 自ら悔る自ら重すると云ふ事                     | 講           | 清沢        |     | ○ | ○ | ○ | ○ |   | ★★★★★  |
| 十一号  | 人の怒るを恐るる事                         | 講           | 清沢        |     | ○ | ○ |   |   |   | ★★     |
| 十二号  | 倫理以上の根拠                           | 講           | 清沢        |     |   |   |   |   | △ | ☆      |
| 三巻一号 | 我以外の物事を当てにせぬこと<br>*咯血したる肺病人に与ふるの書 | 識<br>論      | 清沢        |     | ○ | ○ | ○ | ○ |   | ★★★    |
| 四号   | 宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉                | 講           | 清沢        |     | ○ |   |   |   | ○ | ★★★    |
| 五号   | 他力の救済                             | 精<br>講      | 清沢        |     | ○ |   |   | ○ |   | ★★     |
| 六号   | 我信念                               | 講           | 清沢        |     | ○ |   |   | △ |   | ★★☆    |
| 七巻六号 | 精神主義〔明治三十五年講話〕                    | 講           | 清沢        | 華園  | ○ |   |   | ○ |   | ★★     |

・一覧表の論文タイトルのなかで、ゴチック（太字）で表示してあるのは、編集者に実際に原稿が提出された形跡が認められるものである。さらに、実際に清沢の自筆原稿等が確認されているものについては下線を付した。なお、網掛のものは「講話」欄に掲載されたものである。タイトルの前の\*印は、「精神界」欄および「講話」欄以外に掲載された文章であることを示す。

・イエホの項目に明らかに該当すると判断されるものは○、該当しないわけではないが微妙な問題が指摘できるものは△で示した。なお、○は1ポイント（=★）、△は0.5ポイント（=☆）としてカウントし、それらを合計したものを右端に示した。

・「精」は「精神界」欄、「講」は「講話」欄、「解」は「解釈」欄、「雜」は「雜纂」欄、「論」は「論説」欄に掲載されていることを示す。

掲載され続けていたと考えられることに加え、曉鳥はこの文の一人称に、普段使うことのない「吾人」をわざわざ使っているからである。<sup>35)</sup>

参考までに、これら「宗教的信念の必須条件」、および

「精神主義と性情」の二論文が掲載されたのと同じ時期に『精神界』に発表された、曉鳥敏の手によるある程度まとまった分量をもつ六本の文章について、同じ五つの観点から検討を加えた場合、清沢の文章を意識して書いたと思われる「精神主義と性情」が比較的低い値を示す以外、残りの文章はすべて四ポイント以上の高い値を示す結果となる。このこともまた、『精神界』の「講話」欄に清沢の名前で発表されている論文の多くについて、曉鳥の執筆である可能性を強く疑わせる理由の一つとなろう。

## 注

(1) 本論では、それらの議論を一々紹介することはできな  
いが、たとえば一九九二年に北陸門法道場出版部から出さ  
れている、伊香間祐學著『精神主義』を問い合わせ、近代  
教学は社会の問題に答えたかには、それ以前になされて  
きた「精神主義」批判がおよそ網羅されている。また、  
清沢満之批判の論点を細かく検証したものに、久木幸男  
『検証清沢満之批判』(法藏館、一九九五年)がある。近年

などが挙げられる。

(2) 晓鳥敏「浩々洞と『精神界』」(『資料清沢満之〈資料  
篇〉』同朋舎出版、一九九一年、五五九頁)。

(3) 晓鳥敏「『我が信念』及び清沢先生の生涯」(『曉鳥敏  
全集』八巻、涼風学舎、四七六～四七七頁)。

(4) 雑誌『無尽灯』(明治三十三年十二月号)の「近事  
欄に、雑誌『精神界』の発刊についての短い記事が掲載さ  
れている。

東京留学中の多田鼎、佐々木月樵、曉鳥敏の三兄は、  
清沢先生を主幹となし、村上、斎藤、稻葉、沢柳の諸師  
をその補佐として、現代の青年に大法を宣伝せんとの目  
的を以て、来年一月を期し『精神界』と号する新雑誌を  
発刊することに決定したりと

創刊号の巻末には、当誌の編集兼发行人は曉鳥敏と記さ  
れてはいるものの、清沢満之を主幹とするという記載は見  
当たらない。また大正八年の五月に、曉鳥は「先生の監督  
の下に『精神界』を出すことにしました」(「清沢先生へ、  
『曉鳥敏全集』十二巻、六頁)と述懐しているけれども、  
「主幹」とは名ばかりで、アドバイザー程度の位置づけ  
だつたと考えられる。曉鳥の語るところによれば、『精神

界』を刊行するにあたり、「一々先生の指導を仰ぐやうにした」という。そして実際、暁烏が当誌の署名人となることは清沢の要求でもあつたのである（『全集』八巻、法藏館、三〇二頁）。

（5）暁烏も、多田が清沢の「講話」を「成文」した際、勝手に『小公子』の話を書き加えたことに、はじめは「何であんな事を勝手にしたか」と叱られることを予想していた。だが、清沢がそれを一切咎めなかつたばかりか、「わしも読んでをかんならん」と『小公子』の物語に興味を示したことにもかえつて師の器の大きさを感じたということを述べている（『全集』八巻、法藏館、一二六三—一六四頁）。

（6）『清沢満之全集』八巻、法藏館、五一九頁。

（7）安藤州一「浩々洞の懐旧」（『資料清沢満之〈資料篇〉』同朋舎出版、一九九一年、一七五頁）。

（8）安藤は、このとき初めて任された「成文」を、在洞していいた清沢に閲覧してもらつてゐる。その際、清沢は「二三の文字を修正した」だけで「殆んど私の原稿のままであつた」と、安藤は証言している（『浩々洞の懐旧』、一八五頁）。このことからも、清沢は「成文」されて自分の名前で出される文章の内容に関して、ほとんど口を挟むことがなかつたことがわかる。

（9）暁烏敏編著『清沢満之先生の文と人』大東出版社、一九三九年、二九八—二九九頁。

（10）安藤州一は、「浩々洞の懐旧」で「精神界」の創刊せらるるや、この本領欄は、清沢師自ら筆を執つたので、「精神主義と三世」、「精神主義と唯心論」など、実に理論正しき論文であつた（二三二七頁）と述べてゐる。

（11）この間、六本の文章が『精神界』に掲載されている。二本は「雑纂」欄に掲載されたもの、残りは「講話」欄に掲載されたものである。このうち二巻四号の「雑纂」欄にある「親鸞聖人の御誕生会に」は、明治三十六年四月一日に東京真宗大学で開かれた、宗祖親鸞聖人御誕生の祝賀会に寄せた祝辞を転載したものである。さらに、同じく「雑纂」欄に掲載された「信仰問答（一節）」については、三巻三号に「信仰問答（二）」が掲載されていることから、もともとシリーズものとして企画されたものであつて、清沢が執筆を意図した文章ではなかつた可能性が高いようと思われる。残りの二本については、いずれも「講話」欄に掲載されたものだが、「天職及聖職」は佐々木月樵の「成文」によるもの、「倫理以上の安慰」は安藤州一の「成文」によるものであることがわかつてゐる。

（12）『全集』九巻、岩波書店、一八四頁。

（13）付言すれば、『精神界』に創刊号以来毎号掲載されてゐた清沢の（ものとされる）文章は、二巻十号で一度途切れている。この号が刊行されたのは、明治三十五年十月のことである。この時期、清沢は自身が学監を務める真宗大

学で巻き起こつた騒動の渦中にあつた。この騒動は、結果的に、学監の辞任劇にまで発展している。そうした状況のなか、弟子たちもこの騒動に巻き込まれており、あるいは師の「講話」を「成文」している余裕などなかつたのかもしれない。

騒動の責任を取つて学監を辞任した清沢は、この翌月には浩々洞を去り、自坊のある三河に居を移している。以来、翌年の六月六日に亡くなるまで、浩々洞に戻ることは二度となかつた。

暁鳥の回想によれば、清沢は東京の地を去るのを機に、『精神界』を廃刊したらどうかと、弟子たちに進言したといふ。

明治三十五年の秋、当時は巣鴨にあつた真宗大学の学監をやめて、先生が郷里に帰らるる時に、先生はもうやめてもよいと申されたにも拘らず、私共がどこまでもやつてみますというて続けるやうにしました。(『清沢先生

へ』、『暁鳥敏全集』十二卷、七頁)

しかし、浩々洞の同人たちがその進言に、素直に首を縊に振るはずもなく、『精神界』の言論活動は、主幹・清沢の帰郷後も精力的に続けられ、むしろますますその活発さを増していくことになる。こうした事実を鑑みても、『精神界』を清沢満之によつてリードされた言論雑誌とみなすことには難しいであろう。

(14) 暁鳥敏「清沢先生へ」(『暁鳥敏全集』十二巻、七頁)。

(15) 暁鳥敏「浩々洞と『精神界』」、五一七頁。

(16) 『清沢満之全集』八巻、法藏館、三〇二頁。

(17) 西村見暁「清沢満之先生」、法藏館、一九五一年、三

○一頁。

(18) もつとも、「講話」であることを意識して、意図的に「吾人」という一人称表現を使うのを避けたという見方も成り立ちそつだが、必ずしもそつとは言えない。なぜなら、「講話」欄に掲載された文章のなかでも、残された手紙の内 容などから判断して、元原稿があつたと想定される三論 文・すなわち「公徳問題の基礎」(一巻二号)、「善惡の思 念による修養」(一巻十二号)および「倫理以上の根拠」

(三巻一号)では、一人称表現に「吾人」が用いられてゐるからである。

(19) 『全集』九巻、岩波書店、一八四頁。

(20) 明治三十四年二月二十五日付の、稻葉昌丸、関根仁庵の両氏に宛てた手紙に、清沢は「却説今回精神界第一号ニ付御批評被成下鳴謝此事ニ候」「然ルニ貴命ノ如ク万物一體三誓ノ文公徳問題等一向不出来ニ有之慚赧之至リニ候」(『全集』九巻、二五五頁)と記している。

(21) 「精神主義」(明治三十五年講話) (『全集』六巻、一六七頁)。

(22) 「人生ハ角力場ナリ 人生ノ快事ハ角力ニアリ 角力

ハ大力ヲ貴ブ 力量ハ角力ニヨリテ増進ス 吾人ハ勉メテ

角力スベキナリ 而シテ角力ノ大対手ハ吾人ノ境遇ナリ

吾人ノ忘念ナリ 吾人ハ之ニ克勝スルノ能力ヲ修養セサル

可カラズ 其修養ノ法ハ勉メテ境遇ト角力シ忘念ト角力ス

ルニアリ 力士ノ能事ハ角力スルニアリ 角力ヲ卒ヘテ隠

居スレハ力士ノ資格ヲ失フモノタルヲ忘ルヘカラズ」（『全

集』二巻、一一五頁）。

（23） 晓鳥敏「『我が信念』及び清沢先生の生涯」（『曉鳥敏全集』八巻、四九一页）。

（24） 清沢の死去から約一年半後の『精神界』六巻一号に「有限無限録」が掲載されるにあたり、曉鳥敏は「はしがき」に「本書は先生かやがて精神主義を世に発表し給ふ前年の筆なるか故に修養の道途にある者には適切の教訓少なからず」と記している。

（25） 安藤州一は「浩々洞の懐旧」（一七四頁）で、「清沢師は当時の信仰が最後まで変らず、「我が信念」の絶筆までさらに変動は無かつた」という見方を明確に示している。

（26） 先行研究としては、たとえば、宮城頽「浩々洞」（『清沢満之の研究』教学研究所、一九五七年）や、加来雄之「清沢満之と多田鼎の宗教言説観」（『親鸞教学』八五号、一〇〇五年）などがある。

（27） 晓鳥敏「清沢先生へ」（『曉鳥敏全集』十二巻、三〇頁）。

（28） 安藤州一「浩々洞の懐旧」、一八五頁。

（29） 同、二四三頁。

（30） 『清沢満之全集』八巻、法藏館、二九〇頁。

（31） 安藤州一「浩々洞の懐旧」、二五八頁。

（32） 清沢は明治三十四年四月十八日付けで曉鳥に宛てた手紙に、以下のように綴っている。

昨日午後より今来るか来るかと待居候『精神界』第四号先尅到手、不敢数回翻展仕候。何だか前来第一号の様

に相感じ、特に「花御堂」と「紅白日記」とには、頗る酔はされ候様に相感じ申候。（『全集』九巻、二六〇頁）

（33） ここで一つ重要な思想的問題を指摘しておかなければならぬ。絶筆となつた「我信念」には自筆の原稿が残されているが、四つめの恩寵主義的な傾きということに関連して、編集者による決定的な書き換え、もしくは深刻な誤読が認められる。

まずは、『精神界』三巻六号に発表された「我信念」の表現から見ておこう。

私も以前には有限である不完全であると云ひながら、其有限不完全なる人智を以て、完全なる標準や、無限なる実在を研究せんとする迷妄を脱却し難いことである。私も以前には、真理の標準や善惡の標準が分らなくては、天地も崩れ社会も治まらぬ様に思ふたることであるが、今は真理の標準や善惡の標準が、人智で定まる筈がない

と決着して居ります。

この引用箇所には「私も以前には」という表現が一度ほど登場している。「私も以前には」が文頭に置かれた最初の一文には、文法的に若干の違和感が残るが、素直に読めば、今は「完全なる標準や、無限なる実在を研究せんとする迷妄を脱却し」という意味にとれる。ところが自筆原稿ではもともと、同箇所は次のように記述されているのである。

人智は有限である不完全であると云ひながら、其有限不完全なる人智を以て、完全なる標準や、無限なる実在を研究せんとする迷妄を脱却し難いことである、私も以前には、真理の標準や善惡の標準が分らなくては、天地も崩れ、社会も治まらぬ様に思ふたることであるが、今は真理の標準や善惡の標準が、人智で定まる筈がないと決着して居ります。

これを見ると、最初の一文には、もともと「私も以前には」という表現はなかったことがわかる。この表現がないことで、最初の一文で語られていることの意味はがらりと一変してしまう。つまり、依然、有限で不完全な存在であることを免れないために、清沢には「其有限不完全なる人智を以て、完全なる標準や、無限なる実在を研究せんとする迷妄を脱却」することがどうしてもできないと言わっているのである。補足しておけば、そもそも「以前には」と

過去のことを語るのであれば、文末は「迷妄を脱却し難いことであつた」と結ばれるべきであろう。

これが誰の手による編集であつたか、また故意の書き換えであつたかどうかはつきりしない。だが、もしもこれが暁鳥か多田、どちらかの編集だとするなら、そこには明らかに「精神主義」を恩寵主義的なものと曲解して受け止めていた彼らの誤解が反映されているといわざるを得ないのではないか。

この種の問題は、ほかにもいくつか指摘することができます。しかし本稿では、これ以上、この問題について詳しく論じる余裕はない。あらためて別稿を用意する必要があるのである。

(34) そのほかにも、いくつかのポイントを設定することは可能だが、ここでは省略したい。

(35) 安藤州一は、当時のことを振り返って次のように語つて いる。

『精神界』の創刊せらるるや、この本領欄は、清沢師自ら筆を執つたので、「精神主義と三世」、「精神主義と唯心論」など、実に理論正しき論文であった。然るに暁鳥君が「精神主義性情」といふ一文を認め、これを本領欄に掲げた。(『浩々洞の懐旧』、一二七頁)